

徳川家康

11

徳川家康の
生涯のそと

山岡荘

徳川家康

徳川家康

日蝕月蝕の巻・軍荼利の巻



山岡莊八 講談社



徳川家康 第十一卷 日蝕月蝕の

巻 軍荼利の巻 昭和三十九年十

二月二十日第六刷発行 著者山岡

莊八 発行者 野間省一 印刷所

豊国印刷株式会社 製本所 和田

製本工業株式会社 発行所 株式

会社講談社 東京都文京区音羽町

三ノ一九 振替 東京三九三〇電

話 東京(九四二)一一一一(大代表)

©山岡莊八 一九六三

定価 六百二十円

徳川家康

11

日蝕月蝕の巻
軍荼利の巻

目次

日蝕月蝕の巻

忌中の鯉

七

三成思案

二三

朝鮮撤兵

三四

おんな評定

四九

雲動く

六一

戦後の風

八〇

分裂の芽

九八

加賀模様	一一三
江戸の覚悟	一三三
触れて鳴るもの	一五一
ご遺志談義	一六六
道くらべ	一七七
一つの決意	一八八
虚空は尽きず	二〇〇
有情非情	二二一
死に就く人	二二六

宿縁の火花

二三六

窮鳥猛鳥

二四六

軍荼利の巻

颱風の眼

二六二

空を切り裂く

二七七

出家

二九八

放れ箭

三〇九

支流本流

三二〇

機と断と

三四二

茶碗のこころ

三六二

付録（参考地図及び諸家系譜）

装幀 稲垣行一郎
挿画 木下二介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染
提供 山口勉
表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

11

日蝕月蝕の巻
軍荼利の巻

日蝕月蝕の巻

忌中の鯉

一

家康が、秀吉の死を知らされたのは、死後一刻（二時間）あまり、八月十八日の卯の刻（午前六時）すぎだった。

もはや時間の問題と覚悟はしていたものの、その死を告げて来たのが意外にも、平素からだだならぬ敵意を見せてはばからない石田治部少輔三成だったのにはびっくりした。

朝の早い家康が、於亀の方の介添えて手洗水を使っているところへ、本多正信が、これも面喰った表情で駆けつけ

て、

「——上様、早朝から、思いがけない来客にござりま

す」
そういわれた時にはまだ家康はそれが三成であろうとは思像も出来なかった。

「——思いがけない客というと、江戸からか」

「——いいえ、前の石田曲輪のあるじにござります」

「——なに、三成がやって来たといふ」

「——はい。それも単身、直接お目にかかって密々に申し上げたい儀がござると……」

家康はそれで始めてハッと胸を衝かれた。

（太閤が息を引きとられたな……）

しかし、三成が、何うしてそれを知らせに来たのか？

家康の予想では、三成はそれをひた隠しにかくしておいて、朝鮮からの兵の引きあげを画策する筈であった。恐らく、まだ太閤が生きてある態にして、

「——殿下のご命令でござりまする」

かさにかかったいい方で、大老どもにまで自分の意志を押しつける。三成とはそうした男であり、その策略にさして不手際や無理が無かったら、それはそれで通させてもよい……そんな風に考えていた家康だった。

「——そうか。三成がひとりやって来たのか。よし、客

間へ通しておいて呉れ」

近ごろいよいよ肥えて来ている家康は、正信に命じておいて、着換えにかかった。下帯から帯まで自分では結べなくなつて、於亀の方の手を借りる着換えであつた。

まだ窓が白んだばかりで、小鳥の囀りさえ聞こえて来ない。

「——於亀、太閤は亡くなられたようだな」

そういうと、その声が、そのままひっそりとした無常感になつて自分の胸にかえつて来る。

「——これからじゃ。これからひとしきり、さまざまな亡霊が騒ぎ立てようでな」

於亀の方にはむろん答えようのない、家康の独白だつた。

身仕度を終えると、すぐ次の間から太刀をささげて鳥居新太郎が姿を見せた。家康はそれに軽く手を振つて、

「密々の話であろう。廊下には控えていて中へは入るな」

そういう捨てて寢所を出た。

（あの傲岸な三成が、自分の方からやつて来る……）

冷えた廊下をふみながら、家康はもう一度首をかしげた。自分の前では決して頭巾をとろうとしなかつた三成。

諸侯の前で殊更に、自分に敵意を見せ、浅野長政などを絶えずハラハラさせて来た三成……その三成が、太閤に息を

ひきとられて、自分と妥協する氣になつたといふのであらうか。

（もしそうだとすれば、これは、いったい何う受け止めておくのがよいのか……？）

家康が入つてゆくと三成は珍しく、ニコリと笑つて頭を下げた。

二

本多正信も、むろん太閤薨去の知らせと感ぜとつていると見え、家康が入つてゆくと、

「——ご密談と存じますれば、それがしは」

と、意味ありそうな言葉を残して出ていった。

出ていったからといって警戒を解くことはよもあるまい。正信は家康以上に三成を喰えない男として許してない。

だいいちこの伏見の徳川曲輪の地割がすでに彼等に根強い反感を持たせている。むろん地割の主は三成だったが、三成は内府である家康に城の東方のいちばん低地を割当てている。

そして、西は道を隔てて自分の石田曲輪、北と南を三成の腹心の、宮部祐全と福原長高に割当ててゐる。

それらのどの屋敷からも徳川曲輪は隅々まで見おろせ

る。もしこの三屋敷の築地ぎわにやぐらを組まれ、そこから一斉に鉄砲を撃ちこまれたら、徳川曲輪は瞬時にして壊滅しよう。

この事はただに徳川家の家中の者を憤激させているだけではなく、五奉行の中でも、浅野、増田、大谷などは、

「――治部少輔の、あまりに露骨な敵意の見せよう……」
と、眉を寄せさせているほどののだ。

しかしそれもこれも背後に太閤という虎があつてのこと。その太閤が死んだとなれば、この不自然さも当然同じ姿のままでは済むまい。

家康が若し小胆短慮な人物だったら、ここに起居している限り安眠出来ず、その焦燥が昂じて不慮の争いをも起しかねまい。

起したら一挙に叩ける……そうした下心が或いは三成をしていよいよ傲岸に、いよいよ不遜に家康を挑発させて来ていた原因なのかも知れない。

そうした三成の来訪だけに、本多正信も、鳥居新太郎も心を許す筈はなかった。

「これは早朝から、何か変事でもあったかの」

家康が坐りながら声をかけると、三成はきびしい表情に返って、

「あと一刻あまり致しますと、ご当家へ淀川で獲れまし

た大鯉一尾、浅野長政が届けて参りまする」

と、意想外のことをいい出した。

「ほう、淀川で川狩りでもなされてか」

「いかにも、そのうちの一尾、内府にも招伴させよとあれば、みなみなでお召上り願いたい。むろん、城中でもわれ等一統賑やかに頂戴致す筈でござる」

家康はコクリと一つうなずいて、

「その浅野が鯉をとどける前に貴殿が見えられた……と、すると、われ等に食べよというのは裏のあること、精進せよとのご忠告であらうな」

三成の眼はキラリと光った。が、家康はわざとその方は見ずに、

「人は人それぞれの心掛けがあるもの、ご忠告までもなく、この家康に、太閤薨去の忌中の鯉は食せませぬ。頂いた態につくろって、きびしく精進致しましょうとも」

三成はぐっと言葉に詰って、又あいまいに微笑した。まだまだ虚心坦懷に協力を乞うなどという心境には遠いらしい。

「して、ご薨去は何刻であつたかの」

「内府！ まだご薨去という言葉はお慎み願いたい」

「そうであらうな。高麗引きあげの決定あるまで、喪は秘さねばなりますまい。いや、いろいろとご心労であらう。」

心得て居る」

三

家康の出方があまりにおだやかなので、三成はちょっとまどった様子であった。

太閤が死んだとなれば、今までの「律義な内府——」で通った仮面はかなぐり捨てて、実力をむき出しに、三成を圧迫して来るに違いない。

(何の、そのような狡猾さに氣押されてなるものか……) そうした氣負いで、今朝も必要以上に身構えてやって来ている三成だったのだ。

「ご終焉は、寅の刻(午前四時)でござりました」と、三成はいった。

「ご終焉に立会った者は、曲直瀬玄朔^{まなせ げんさく}以下の侍医どもと、若君、若君のご生母、それにそれがしと浅野長政、前田玄以と……まことに静かな大往生にござりました」

家康はその言葉を半ば聞いていなかった。

それよりも三成が、自分の方から、すすんで太閤の死を告げにやって来た真意の方がいぶかしい。当然秘すべき喪を、家康だけに隠さないといい見せかけが、加藤清正に、鼻持ちならぬ小才子……そう評させた小さな体にまざまざと感じられる。

したがって家康は、息をひきとる枕辺に、

「——北政所は、おわきなんだかの」

いちばん先にそう訊いてみたいところであった。

家康の眼に映じた側近では、文字どおり寝食を忘れて看護に当たっていたのは、大坂城から駆けつけていた北政所、寧々^{ねね}夫人ひとりに見えた。

無理もない。

秀頼はまだ数え年六つという頃はなきで、父の死の悲嘆が噛みわけられる年齢ではなく、その生母の淀の方は、これまた死後の事がどうなりゆくかとその心配だけでせいっぱいなのだ……

ところが三成はその看護に、いちばん深い悲しみとまごころを捧げ尽していた北政所の名を挙げない。或は寧々が疲れきって、自室へ戻っていた間に、息をひき取ったのであろうか……?

いや、それ以上に大きな氣掛りは、

「——まことに静かな大往生……」

という言葉の飾りであった。三日前の十五日に、家康と前田玄以を枕元に呼び寄せて、

「——天下のことは家康、秀頼の養育は利家に……」¹

そういったときに秀吉の正氣の最後で、その日の暮れ方にはもはや語りもならず、人の言葉も聞きわけられない生

ける屍になっていたのだ。しかし、家康はその不審な言葉のかざりを責める気にはなれなかった。

「大往生とうけたまわって、せめて、心が軽くなる。して、死後のことは、あれこれお指図があったであらうな」
むろん指図などあらうとは思われず、あったといえ、それは三成の意志と、知っていながら訊ねていった。

三成はさすがにホッと吐息した。

「いかにもござりました」

「それを承ろうかの」

「申し上げましょう。喪は、全軍が、高麗から本国へ引きあげ終了まで秘めること」

「ごもっともじゃ」

「遺骸の儀は、高野山の木食上人（もくじきしょうにん）を導師として、洛東阿弥陀ヶ峰に密葬のこと」

三成はそこまでいって又声を低めた。

「但しこの儀は、五奉行以外には洩すなどのご遺言にござりました」

家康の眼がはじめてギロリと光っていった。

四

「治部どの、するとお許はご遺言にそむいて、この家康に、即刻薨去を知らせに來られたといわれるのか」

家康に問い返されて、三成の唇はまた微かにほころびた。

「いかにも。そこで奉行どもは相談のうえ、洛東阿弥陀ヶ峰の密葬場へは、木食応基と前田玄以の兩人だけでお供することになりました」

「ほう、世間はそれで怪しむまいかの」

「むろんそれへの用意も致す所存……世間へは、大仏の修築とふれさせて、ささやかな社殿と墳墓を作らせておきます」

「なるほど、それで淀川の大鯉となったわけか」

「仰せの通り、浅野長政、その申合せに従うて、内府のもとへも大鯉を持参致しますれば、密葬の相済みまするまで、何事もご存知なかった態にしてご賞味おき願いたい」

家康の眼は再びギロリと大きく光った。

（何という小細工……）

その非難はしかし口にすると、少々の問答では收拾つかなくなりそうだった。相手はこれを意識の無かった瀕死の人の遺言……と言いつけているのだから……

「すると、お許たちもご城内で、みなみなその鯉を食膳にのぼすわけか」

「大事の前でござれば」

「治部どの、それはよいとして、するとお許は、まずご遺

言にそむいて、太閤の薨去をわしに知らせ、浅野や前田を裏切つて、わしにまえて鯉の秘密を打明けた……と、相成るようじゃの」

言葉は柔らかかったが、これ以上に痛烈な皮肉はなかった。案のごとく、三成の額はサツと一度に蒼白んだ。

「それには、事情がござる」

「ほう、いかなる事情か、うけたまわつておきたいものじゃ」

「申し上げます。これは北政所さまのお指図でござる」

「なに、北政所が、太閤のご遺言にそむけといわつしやつたか」

「北政所さまは、ご終焉の場に居合せなだったので、それがし、ご報告かたがたお願いに罷り出しました」

「北政所にお願ひ……とは？」

「城内で、わざわざ鯉の賞味で喪を秘している折りに、政所さまに髪でもおろされましてはみな的心労も水の泡……それでお願いにまかり出ましたところ、この儀は、奉行どもの計らいだけでは心もとない、早速内府に打明けて、ご協力を仰ぐよう……さもなければ、この場で髪をおろすと申されました」

家康は思わず固く息をのんだ。

(これでわかった！)

三成は、やはり自分の意志で家康に接近しようとして来たものではなかった。それにしても北政所の言葉はまた何というはげしさであろうか。

恐らく息をひき取る場に呼び出されなかった怒りも加わつてのことであろうが、それ以上に、良人の密葬当日、城内で大鯉を煮て食わせるなどという小細工が、たまらなくいとわしかったからに違いない。

「そうであつたか。それならば家康も、いよいよ虚心にお力添えをせねばなるまい。して……その他に太閤のご遺言は……？」

そういつた時には、家康も、何か全身の力が抜けてゆくような気がした。

(太閤は、自分の死後を、この男に、このように、奔弄されると思つていたであらうか……?)

五

「——死人に口なし」の俗語が、これほど露骨に利用されたのでは、北政所ならずとも怒りだすに違いない。息をひきとるおりの太閤に、口の利けよう筈もなく、もし三成にどこまでも故人の意志を尊重してゆく心があつたら、淀の大鯉どころか、まず虚心に、五大老、中老、五奉行などにその死を告げて善後策を協議するのが順当であり礼儀であ

ろう。

その場合の裁決は、むろん「政治向きの一切」を遺託された家康自身が行うべきで、それをしなかった三成が、北政所に叱られたということは、政所ひとり悲しみの底にあるって厳然と正気を吐いたものといえる。

(わしには叱れない……)

その事が家康は妙に故人に面映ゆかった。

むろん三成の器量を故人ほどには買っていない。その故であろうか、何か気抜けが先に立って、きびしい態度はとり得なかった。

むしろ小児をあやすように、この上まだ何を「遺言」といい出す気か。それを知っておかねばならぬと思う関心が先立つのだ。

家康に訊ねられると、三成は一膝すすめた。

眼から鼻へぬけるほどの才気をもったこの男は、或いは家康の問いを、自分への妥協のあらわれと受取ったのかも知れない。

「内府、北政所さまのご意見はいちいち道理で、返す言葉もござりませなんだ」

「わしは、ほかにまだご遺言は無かったかとお訊ねしたのだが……」

「その事に関連してでござる」

三成はハッキリとした口調で、

「ご遺言では、喪を秘したまま、早々に全軍を本国へ召還せよとありました。しかし、このお達しは、われ等奉行や監軍どもの署名だけでは相成らぬというのが、北政所さまのご意見で」

「ほう、すると北政所が、ご遺言に異議をさしはさまれたと申されるか」

「いや、ご異議というではござらぬが、万一そのお達しと時を同じゅうして、太閤薨去のことが現地へ洩れなば、騒動は避け得られまいとのご意見にござりました」

「なるほど、現地では加藤、小西等の反目もあることゆえ……」

「それゆえ、これには、是非とも五大老の連署が必要、それを遅滞なく運ぶためには先ずもって内府にその旨を打明け、ご相談のうえお智恵を借りるが上策と申されてござる」

家康は軽くうなずいて、あとに続く言葉待った。

少しずつ三成来訪の目的がわかってくる。自分の意志で訪れたのではないが、北政所の申分がもっともと思われたゆえ、今までの行きがかりは捨ててやって来た……それゆえ家康も、異心のない証拠を自分に示さねばならぬといっているようであった。

「内府、北政所さまのお言葉の意味、三成にはちと解しかねる節がござるが」

三成は声をひそめてまた小さく膝をよせた。

「北政所さまは、内府を心からのお味方とお信じなされて、それでお智恵を借りよと仰せられておわすのか。それとも、内府に何も彼も打明けおいて、悔いなく、十分用意のうえで撤兵にかかれという謎か、その辺、われ等にも判断がつきかねまする」

家康は、はじめてまともに三成を見返した。

(なるほどこれは思いのほかの策謀家……)

家康の胸で怒りの虫がビチビチと音をたてて跳ねだした。

六

加藤清正に肩入れして、二度の朝鮮出兵に、小西行長と清正とに先陣を争わせた北政所は、三成にとって決して快よい存在ではあるまい。

簡単にいえば、北政所は、子飼いの、加藤、福島、黒田、浅野、細川などの武断派を擁して、石田、小西派の前に立ちをはかる邪魔ものと思われているのであらう。その北政所が、家康に相談せよといった……その言葉の裏の意味は何であらうか？ と底意地わるく問いかけて来るので

ある。

もし家康が、これ等武断派と接近し、北政所と結んで、三成等と対立する気ならば覚悟があるぞ……そういいたげな様子を言外に匂わせて、

「――北政所さまは、内府を心からのお味方と信じなされておわそうか……」

などとあらぬことをいい出して来た。

これが自分の家臣であつたら、家康は頭から叱りとばすところであつた。

「――お手前の考え方は大丈夫のそれではないぞ。そのような愚にもつかぬ感情の波に身を沈めて大局を見失うたら何とする。小さな感情の対立はやがて大きな派閥のもととなり、その派閥がまた憎悪を積み重ねて、ぬきさしならぬ破滅の原因を作るものだ」と気付かぬのか」

しかし、三成は家康の家臣ではなかった。

それどころか、秀吉子飼いの秀才中の秀才で、豊家の将来を一身に担った氣でいる男なのだ。

(秀吉が生きてあるうちは、確かにこれで使えた男だが……)

剛愎で勝気で、みずから秀才と自負しているだけに、何事とも思ひのままにせねば納まらぬ。

(困った男じゃ……)